

沖繩・豊見城村のキジムナー話

中 村 史

はじめに

豊見城村(沖繩県島尻郡)は沖繩本島南西部に位置し、那覇市に隣接した大変大きな村である。かつては那覇市へ野菜を出荷する農村地帯であったが、近年那覇市のベッドタウンとして第三次産業を中心に発展してきている。人口が急増しつつあり、近く町を飛び越えて市になる予定と聞いている。歴史あるいは伝説的には、豊見城村は瀬長島(那覇空港近く)に始まり、つぎに本島の現豊見城城跡(豊見城村字豊見城)付近が開かれ、さらに周辺へと広がっていったという。三山時代(一四世紀初)に南山王の關係者が豊見城城を築き、中山によつて南山と北山が滅ぼされて三山統一となった(一四二九年)のち、中山の支配する琉球王府時代に豊見城真切が置かれた。これが豊見城村となったのは明治四一年(一九〇八)である。戦時中には海軍壕(現豊見城村字豊見城)が掘られ、激戦地になったところでもある。

さて、福田晃氏の指導する立命館大学説話文学研究会では、平成元年(一九八九)、平成二年(一九九〇)夏季に、豊見城村の昔話調査を行った。豊見城村教育委員会の協力を得、沖繩県庁の安里和子氏、那覇市役所の伊芸弘子氏らの参加があった。当時立命館大学の大学院生であったわたくしも、この集団調査に参加し、研究会を代表して調

查概要と話型一覽(全三〇二話)、例話の中間報告を公刊した。⁽³⁾

その後、安里氏(現在「いきいきふれあい財団」副理事長)とともにこの仕事を受け継ぎ、調査と資料整理を続けている。伝説と昔話を中心とした豊見城村の民間説話(口承文芸)の、沖繩、あるいは豊見城村としての特徴を示しつつ、これをまとめる作業の一環として、今回、キジムナー関係の伝説(前出中間報告の番号47〜71の話)を取り上げたいと思う。

一

キジムナーというのは沖繩本島を中心とする南島(南西諸島)で信ぜられてきた妖怪の類である。人間の子供くらいの大きさで、全身が赤くばさばさのおかつば頭をしているとか、ウスク(雀榕)やガジュマルの樹に棲みつく「木の精」だとか言われる。蛸や鶏を嫌がるとも、屁を怖がるとも言う。人間と仲良くなつて一緒に漁に行き、たくさんの魚を取つてやつたので、その人の家は豊かになつたという、いわゆる「キジムナーと友達」型の話などはよく聞かれる。たいていの場合、嫌気のさした人間がキジムナーと縁を切つて、結局その家は没落するのである。また、夜中に寝ている人間の胸を押さえるとその人はうなされて苦しむということ、「わたしもキジムナーに押さえられたことがある」と、自らの体験を語られるお年寄りが多い。あるいはまた、夜に野原で見られる火を「キジムナー火」と呼んだりもしている。こうした「キジムナーの胸押さえ」も「キジムナー火」も最近はなくなつたと語り手の方々は言う。

なお、奄美のケンムンはキジムナーと同類の妖怪であり、宮古、八重山にもそうした妖怪がいる。沖繩本島の中でも、本島に近い各離島でも少しずつその名前や性格は異なっており(アカカネジャー、ブナガヤーなど)、それらが本来別々の妖怪であつたという見解⁽⁵⁾は妥当であろう。

これまでに公刊されてきた民話集・昔話集（市町村史に収められたものも含めて）に採られた「キジムナーと友達」型の話は、「伝説」あるいは「世間話」あるいは「因縁・化物話」と言つてよい性格を持っている。伝説は、共同体の神や祖先への人々の信仰に発祥するものであり、また信仰をよりどころとし、真実として伝承されるものである。それに対して、昔話、なかでもいわゆる「本格昔話」、または「完形昔話」は、人々の知的興味のために虚構に傾斜していった話の世界である。因縁・化物話は、柳田国男氏が完形昔話に対して「派生昔話」と命名した話のひとつであり、比較的単純な怪異譚である。そして、世間話は言つてみれば最近あつた事実譚である。⁽⁸⁾

さて、南島にあつては伝承の中心は伝説にあると言われ、現在も伝説を支える信仰の基盤が残っている。豊見城村の名嘉地集落には大屋という屋号の家がある。そして、その近隣の人々は、名嘉地大屋のある人がキジムナーと漁に行つて金持ちになつたが、のちにはキジムナーを追い出した云々と語る。こうした「キジムナーと友達」は、ほかの地域に比べ、伝説、あるいは世間話としての性格が強いようである。一方、名嘉地の大屋家ではこれは伝説というよりむしろ信仰として伝えられているという観があつた。また、糸満の潮平や慶良間との関わりが見られることも豊見城村の「キジムナーと友達」の特徴である。以下、本稿の前半では、これらについて順々に考察してゆきたい。後半では「キジムナーと友達」（復讐型）の語り（「慶良間のキジムナー」）を具体例として挙げ、他地域の同じ話型の語りや『島尻郡誌』『遺老説伝』の話と比較しつつ、こうした語りの成立する背景について考察してゆきたい。

二

これまでに、「キジムナーと友達」型の話が特定の土地や家と結びついて例はいくつか報告されている。主なものとしては、

- ・宜野湾市新成村の中泊（から熱田村の比嘉に移った）⁽¹⁰⁾
- ・石川市東恩納の当⁽¹¹⁾
- ・豊見城村名嘉地の大屋

などであるが、豊見城村名嘉地の大屋にいたとする伝承が最も有名である。

また、豊見城村では、平成元年・二年の集団調査の際に、キジムナーに関するさまざまな伝承を採録した。そのうち、「キジムナーと友達」型の話では、しばしば、

- ・糸満市潮平の玉井（または玉江、玉栄という屋号の家）から、豊見城村名嘉地の大屋へ、あるいは、
 - ・豊見城の内間から、名嘉地の大屋へ、あるいは、
 - ・名嘉地の大屋から、慶良間（渡嘉敷）の新屋小へ、さらに、那覇市の安里八幡へ、
- と、キジムナーがある家からある家へ移り、もとの家は没落してしまっただとも語られた。

たとえば、「キジムナーと友達」の語り手の一人である字豊見城の長嶺輯徳さんは、

このうちから二軒目の家のおばあさんのところであった話。

と言われた。⁽¹²⁾「このうち」とは調査者が訪問しているお宅、「二軒めの家」とは豊見城内間のことである。長嶺さんはまた、

キジムナーはおばあさんと漁にでかけたが、おならが嫌で、そこから名嘉地大屋のおじいさんのところへ行つた。名嘉地大屋は金満家になって今は三代目。キジムナーはどうなったかわからない。

と語られた。また、語りのなかに、「内間のプー」という言葉も出てきた。

そして、字宜保の赤嶺光栄さんは、

名嘉地のキジムナーははじめ豊見城の内間にいたらしい。

云々と語られ、やはり、「内間のプー」という言葉を使っておられた。⁽¹³⁾ おそらく、「豊見城内間の老女がキジムナーと親しくなつてともに漁に出たが、彼女が放屁したのを恐れてキジムナーは名嘉地大屋に移った。」という話がよく知られたため、一種の成語になったものであろう。字伊良波の大城亀次さんも「キジムナーは糸満の潮平玉井から名嘉地大屋に移った」とおっしゃられた。⁽¹⁴⁾

平成元年・二年の集団調査では、名嘉地大屋近隣の人々によって以上のように伝承されているのが確認されたが、名嘉地大屋で聞き取り調査をする機会には恵まれなかった。

三

さて、平成九年八月二〇日(水)、豊見城村の調査を引き継いだわたくしは名嘉地の上原さん宅を訪れた。⁽¹⁵⁾ このお宅がいわゆる名嘉地大屋である。上原さんは農業をしておられる裕福なお宅で、立派なお屋敷の庭にはこれまで見たことのないくらい大きなウスクの木があった。現当主夫人であるヨシさんによれば、昔糸満の潮平玉井からキジムナーがこちらの家に来て、⁽¹⁶⁾ ご先祖が昼は畑仕事をし、夜はこのウスクから出てきたキジムナーとイザリに行ったそうである。ただ、これが何代前の祖先であるかはわからないとのことであった。名嘉地の西側の現在与根などの集落になっているあたりは百数十年以前に干拓によってできた土地であり、旧国道三三一号線から西はかつて海だったようである。⁽¹⁷⁾ すると、そのころまで、名嘉地大屋さんのお宅は海岸のすぐそばだったのであり、農業と漁業を兼ねてされていたようである。ご先祖がキジムナーと漁に行ったというのはこの時代までの出来事ということになる。

また、「キジムナーは今でもこの家にいるのか」というわたくしの問いに対して、ヨシさんは「いらっしやると思う」と答えられた。そして、この家ではキジムナーが住むウスクの木を大事にして祀っているとのことであった。

こうしたキジムナーのありかたは家の神としての性格を持ちあわせているように感ぜられる。

また、大屋さんは何代も前から名嘉地集落の素封家であつたようで、ヨシさんは、大屋家が集落の上納金を全額立て替えて払つたことがある¹⁸⁾、また、瀬長島(の手前?)まで他人の土地を踏まずに歩いて行くことができるくらい土地を持つていた、と語られた。その土地は豚と取り替えたりなど、少しづつ人手に渡して今はずいぶん少なくなつたとのことである。

ただ、こうした何代にもわたるこの家の繁栄ぶりはキジムナーと結び付けて語られることはなかつた。大屋家の人々の努力と勤勉によつてもたらされた富であると誇りを持つておられるようであつた。おそらくこの家の人々の意識が近代化され、キジムナーが富をもたらず存在であるとする本来の信仰が希薄になつた結果、キジムナーの存在と家の繁栄との関係が切り離されてしまつたものであろうかと思われる¹⁹⁾。

したがつて、「名嘉地大屋がキジムナーと漁にでかけて金持ちになつたが……」という例の話は、この家を取り巻く近隣の人々によつて語り出されたと考えられそうである。そこに大屋家の富に対する一種の羨望や嫉妬といった感情が介在していなかつたとは言えない。そもそも大屋家では今も屋敷のウスクの木にキジムナーがいると考えておられるのであるから、「キジムナーとの付き合いが嫌になつて追い出した」という結末などは近隣の人々によつて語り出されたかとの推量を確かなものにしていなくてはならぬ。

四

このように、豊見城村の「キジムナーと友達」は、名嘉地の大屋という特定の家に伝わる話として知られている。こういつた、特定の土地や家と結びついている話は、「最近どこそこの誰々にあつた話」という類いの世間話、あるいは、その土地や家の信仰に関わる伝説と考えられる。これに対し、どことも知れぬ場所で誰とも伝えられぬ人が

キジムナーと友達になったという話も、豊見城村のほかでは多く聞かれるのであり、こちらは、いわば虚構の話であつて、「どこの」「誰」よりも怪異そのものに興味がある話、つまり、いわゆる因縁・化物話と考えるのが適當であらう。

そうすると、大屋家では、かつて祖先のある人がキジムナーと漁に出掛けたと、伝説、あるいはむしろその根幹にある家の信仰として伝えていようである。それに対し、近隣の人々によって語り出され、話として発展したと思われる「キジムナーと友達」は伝説というよりはむしろ世間話である。大屋家では何代前の話かわからないこのことであつたが、前述のように、長嶺輯徳さんは、「大屋家ではキジムナーのおかげで金満家になつて三代目」と言つておられた。今、真偽のほどを確認することはできないが、名嘉地大屋とキジムナーとの交際は近隣の人々によつて比較的最近の事件と考えられているわけであり、世間話であるとの感を強くする。

五

豊見城村のキジムナー話のもうひとつの特徴は、糸満や慶良間（渡嘉敷）との関わりが深いことである。現在糸満市は豊見城村の南、沖繩本島最南端に位置する。また、慶良間（列島）は渡嘉敷島、座間味島、阿嘉島などからなる、沖繩本島に近接した島々である。豊見城村からも小高い場所に立つこの慶良間列島を望み見ることができ、豊見城村の人々の間では、前述のように、キジムナーは糸満潮平の玉井という屋号の家から名嘉地大屋に來たり、そこから出て慶良間（渡嘉敷）の新屋小に行つてしまつたりしたと語られている。これらに類する話は糸満市や慶良間の渡嘉敷村でも聞くことができる。²⁰⁾

ところで、糸満市の旧糸満町は歴史的にも日本各地のみならず世界にも進出した「糸満漁民」で有名な土地である。²¹⁾潮平は旧糸満町の近隣のやはりかつては海に面していた集落であり、当然漁業は行つていたと思われる（ただし、

玉井という家については十分に調べ得ていない⁽²⁾。また、慶良間列島の渡嘉敷村は琉球王府時代に官船の水夫を輩出した土地であり、のちには漁業とくに鰹漁で戦前まで栄えた⁽²³⁾（新屋小という家についても十分に調べ得ていない）。さきほどキジムナーに家の神としての性格を指摘したが、その一方、キジムナーと親しくなることによつて大漁を得るといふ話は、漁民あるいは航海民など海の民に信仰された神としてのキジムナーの性格を示しているようである。また、糸満潮平の玉井↓名嘉地の大屋↓慶良間の新家小というキジムナーの動きは、こうした海の民である人々の活動領域あるいは移住範囲などを示しているのかもしれない。名嘉地の上原さんのご親戚にも渡嘉敷に移つた方があるとのことであつた。このあたり推測の範囲に止まつている事柄が多いので、さらに調査を重ねる必要がある。

六

つぎに、名嘉地大屋とキジムナーの話の後日譚であり、「キジムナーと友達」(復讐型)の話型を取る「慶良間のキジムナー」(71)を紹介したい⁽²⁴⁾。語り手は、豊見城村字渡橋名^{とせな}の赤嶺茂さんである。大正一四年三月生、渡橋名出身。もと教員で校長も勤められた方である。赤嶺さんの語りをカセット・テープに録音したものを翻字し、その前半を梗概にして示せば、

キジムナーは糸満市字潮平の玉井という家から豊見城村字名嘉地の大屋という家へ来た。毎日キジムナーに漁に連れて行かれて嫌になつた主人が巢のウスク木に釘を打つたので、キジムナーは慶良間の新屋小に行つた。後半は、キジムナーと慶良間の新屋小との間の事件を語る。

キジムナーと漁に行くのが嫌になつた主人夫婦は、相談してキジムナーの巢の周りに藁を積み、主人がキジムナーと漁に出ている間に、妻が藁に火をつけて巢を燃やした。すると、キジムナーは那覇の安里にあるウスク木に移つた。遊びに来いと言われていた主人は、あるとき那覇に用事で出掛けたので、そこに立ち寄つた。

そして、人間の姿に化けていたキジムナーに、それとも知らず、慶良間での出来事を話したところ、怒ったキジムナーに主人は眼を潰された。

七

ここで、少し長くなるが、後半部分を翻字したものを一部中略を入れて示しておきたい。

…毎晩連れて行かれるからね、本人も大変だがね、(中略)まず奥さんが第一大変らしいよ。毎晩旦那はいないからな、あんた、夫婦の仕事が何もできないわけさあ。いろいろとね、夫婦のいろんな、あると思うんだが。(中略)夫婦相談したわけだ。もうね、旦那が妻によ、「わたしが、キジムナーといっしょに海に、漁ぎよに行くからね、その間にね、キジムナーが住んでいる、このウスクにね、木にさ、これ燃やしなさい。(中略)そうしたらね、これ、キジムナーは住めなくなるから、もうね、どつかよそに行くはずだから」ということでね、相談したわけだ、夫婦ね。

そうしたら、(中略)この、キジムナーは、例によって、主人すじんを朝早く起こしに来た。だから、主人は何げなくね、これを騙すわけであるけれども、これを全然悟られないようにいっしょに行くわけ。その間にもう、この主人は毎日、キジムナーが住んでいるね、木の根っこに、藁をたくさん積むわけよ。したら、キジムナーは不思議に思つてね、キジムナーが主人に聞くわけだ。「あんたはわたしのね、住んでいるこの、木の下に、木の下にね、藁を、いつも重ねておるが、何で、こんなに藁を置くのか」つて、キジムナーが聞いたわけね。そこで、「燃やすためだ」つて言つたらもうすぐばれるからね、そうは言わないでね。「これはね、冬になつたら寒くなるでしょう。寒くなつたらね、あんた困るでしょう。だから、あんたが寒くならないように、あんたが住んでいる木の周囲に、藁を置いたのだ」と、(中略)言つて、主人はうまくごまかしたらしいね。そして、ごまかして

おいて、藁を積んでからね、今度出るときに、妻にね、「僕らがあつちに漁に行つてる間に、これ燃やしなさい。この藁」と。(中略)

ここでは、キジムナーに夫が連れ出されることを妻が嫌うこと、夫とキジムナーがなぜ藁を積むかの問答をすることなどに注目したい。引用を続けよう。

漁に行つたらね、妻はね、良い場だというんで、すぐこれがふたり出て行つたもんだから、旦那に言われたとおり、火つけたらしいよ。あの、藁にね、キジムナーが住んでいる。そうしたら、この、木いはね、木も藁も燃えたわけだね。(中略)

この、海における、このふたりはね、キジムナーとこの主は、主はわからんがキジムナーはね、鼻をぴくぴくさせたわけだ。これが燃え始めたから。キジムナーというのはやはり、神通力があるからね、わかるわけ。自分の巢が火つけられている、藁に火つけられている。「ありや、(中略)こげの、こげた匂いがする」とかね。

「こげくさいなあ」とか何とか言つて。このキジムナーが言うわけさ、その主人に。「あんたしないか」つて。「いやあ、何も知らない」と言いながら、ま、主人はね、さては、うちの妻がね、火つけたな、藁に火つけたんだと主人は思つたわけよね。思つたわけだが、それを、キジムナーに言わないで、やつたわけだ。

そうしたらね、(中略)このキジムナーはね、帰つて来たらね、ふたり、もう燃えておるわけさあ、自分の巢は。もう燃えてしまった。はい大変だと。もうここには住めないということだね、(中略)そうしたらね、「もうわたしここには住めないからね、この木はもう、藁で燃えてしまつてもう住めないから、もうわたしはね、ここから出て行きます」と。どこに行くかと言うと、「安里ね、那覇市の安里。そこにね、(中略)大きなウスクのあるところがあるから、(中略)そこは幸いね、誰も住んでいない、いわゆるキジムナーの巢になるけどね、キジムナーの巢として誰もキジムナーはいないから、この木は。ここ空き屋敷に、空き家になつているから、

そこにわたしは行きます。その主になる」って言つてね。この、主人には言つて。そして、「あんたもね、もし那覇にね、慶良間から用事で、那覇に用事で来るときは、安里に来なさい。その木に、わたしはそこにおるからね。そこに遊びに来なさい」って言つてね。そして、飛んで行って、安里に行つたらしい。

ここでは、焦げ臭い匂いがするしないという、キジムナーと夫の間答などに注意したい。さらにもう少し引用を続けよう。

そうしたらね、この主人はあとでね、那覇に用事があつて、(中略)慶良間からね、那覇まで行つたら、この人がね、思い出して、「あ、そうだ、このキジムナーは、『安里に来なさい。那覇に来る場合は、安里のどこのウスクの木におるから、来なさい』と言つたから、行つてみよう」と思い出してね、キジムナーの言つているのを、言つたのを思い出して行つたらしいですよ。

行つたらね、キジムナーはもう神通力があるから人に化けてさ、ね、キジムナーの格好してないわけよ。人の格好しておるわけな、普通の、人間の格好して。うちもあつて、うちぐわーも造つてね、ちゃんと。(中略)そして、この、慶良間から来た人がね、来たから。見に来たから。「ああ、いらつしゃい、いらつしゃい」と言つてね。キジムナーの話はしないでよ。(中略)普通の人だと思つて、この人もね、「お茶飲みなさい。せつかくここまで来て。何しに来たか。ここまで来てお茶飲みなさい」と言つて、この人は、騙されてるもんだから、(中略)人だと思つて、そこでお茶飲んで、そして得々と自分の話をしたわけよ、慶良間での。「わたしはこんなにしてね、キジムナーを、燃やしたからね。燃やしてね、キジムナーを逃がしたんだよ」と言つてね、話したわけだ、このおじいに。化けてるおじいにね。キジムナーとはわからんでね。(中略)話したら、このキジムナーはね、もうこれを聞いて、もう怒つてね。「今までは友達だったが、あつちでは、慶良間では友達でいっしょに釣りをしたたから、友達で遊びに来いと言つたんだけど、これはわたしを逃がすため、わたしを追い出すた

めにわざわざ、わたしの巢に火をつけたの、だなあ」ということでね、(中略)このキジムナーは怒って、すぐそばにあった、竈の、薪の、火のついたようなものを、この人のすぐ、目に突っ込んでね、「あんたはわたしを騙して、私の巢を燃やしたのはあんたが夫婦だな。巢を作った、わたしはキジムナーだ」と言っていて、この人、盲になって慶良間に帰ったつていう話。こんな話があるんですよ。

八

漁師などがキジムナーと親しくなって大漁し金持ちになる「キジムナーと友達」型の話には類話の採集例が多い。簡便に見るにはとりあえず『日本昔話通観』第二六卷(沖繩²⁵)がよい。たいていの場合、毎晩のことなので嫌になった人間が、巢の木に火をつけるか釘を打ちこむ、キジムナーの嫌いな蛸や鶏を使う、放屁するなどしてキジムナーと縁を切る。そうしてその家は再び貧しくなってしまうたりする。こうした、復讐の後日譚がつかない「キジムナーと友達」の話は数多く、佐喜真興英氏の『南島説話』(大正一一年)や、その後の各種昔話集にも収められ、連続と伝承の続いていることが知られる。

それに対し、

・キジムナーと親しくなった人が妻と相談して巢の木を焼きキジムナーを追い出す

・のちにキジムナーを訪ねたその人がキジムナーの化した人物に眼を潰される

という展開をたどる復讐型の話は、のちに挙げる『遺老説伝』にも類話が見えるものの、決してその数は多くない。語り手の赤嶺さんは語りのあとで、「(この話は)読谷の昔話集にある」と断っておられる。調べてみると、「読谷の昔話集」とは読谷村が公刊した『長浜の民話』²⁶(「15 キジムナーの話」)のことである。これをつぎに紹介してみよう。

ある夫婦家庭の中で、妙な出来事がありました。えー、それは、キジムナーが、毎晩その亭主をつれて海に出ました。で、キジムナーといっしょに海にでますと、必ず、この魚や蛸などを大漁に取って帰りました。漁のできることは楽しみですが、この家内が、「何とかこのキジムナーからひき離す方法はないものか。」と考えました。で、家内が考え出した名案に、「何とかこのキジムナーの家を焼いたらそこから出るであろう。」ということを考え出しましたので、それから後、毎日毎日、かやを刈りて、その木の下に積み上げました。

ある夜、キジムナーといっしょに海に行つてさかんにこう、魚、蛸を取つてゐる時に、キジムナーいわく、「何か自分の家を焼かれていますよな匂いがする。」と。で、その時に、この男の家内は、すでにその木の下にキジムナーの家に、火をつけていたようです。

帰つてみると、自分の家を焼かれています。そこにいることもできないで、首里の弁が嶽の庭に行つたようです。それから、キジムナーは、「えー首里の弁が嶽の庭の大きな木の下にいますので、向こうに出る場合にはよつてくれないか。」というたようです。

ある日、この人も那覇に出る用がありましたので、「せっかくいうていたので、まず行つてみよう。」とそこを訪ねたようです。訪ねて行つたの、ふとした民家に入つて、その庭で話したようです。そこに、色々とう話しているうちに、その主人が、又、キジムナーであつた。その話をしてゐるうちに「私の家を焼いたのは、君の家内か、つまらない！」という事で、すぐ、いきなりこう、棒で、その男の目を突き抜いたという事で、盲にされた男という話であります。

ふたつの話を比較してみると、赤嶺さんは『長浜の民話』によつて話されたのではないようである。というのも、まず、長浜の話ではキジムナーと漁をする舞台は明らかに成つておらず、慶良間とはされていない。また、キジムナーが移る場所も安里のかわりに「首里の弁が嶽の庭」となつてゐる。そして、キジムナーが棲みつく木もウスク

と特定されず、語り全体が赤嶺さんのものよりずっと簡略だからである。

九

さて、以上のようなキジムナーによる復讐の後日譚がつく話は、ほかにいくつか記録されている。ひとつは、有名な『島尻郡誌』(昭和二年初版)に載せられるものであり、キジムナーは久米島仲里間切真謝村まじやのウスク下あぶから那覇の安里八幡に移ったと語る。以下の引用本文は少し変えてある。

往昔むかし、仲里間切真謝村のウスク下と言ふ家に、キジムンと仲良しになつた若者があつた。キジムンは此の家の後にあるウスクの根元に巢を構え、雨の日も風の日も休むことなく、夜になると海に求食あきりに出掛けた。キジムンは毎晩の様に、若者の「吾が親友」を海に連れ出すことを忘れなかつた。時々ならよいが、どんな空模様くもの悪い夜でも連れ出されるので、いゝ加減あきくしてゐた。然し御本人より妻の方が懲りくくだつた。さうだろう。毎晩の様に吾が良人を連れ出されてはたまらない。どうかしてキジムナーとの仲を切つて、夫の海行きを止めたいと思つても、ウツカリ手も出せないで困つてゐた。

或時妻は夫にその事をはかつて、キジムンの家を焼く事にした。其後夫は野良帰りには毎日茅を刈りて来て、ウスクの根元に積み重ねてゐた。「何うしたんだね、斯んなに沢山茅を刈り集めて…」と、或日キジムンが訊いた。「イヤね、お前が冬になると寒からうと思つてねえ…」「あゝそうだつたか。御苦労々々々…」

いつしか冬になつた。或晩二人は遠くシーザミと言ふ、珊瑚礁の岬の所にいさりに出掛けた。此の晩二人が海に出掛けてゐる間に、件の茅に火を点けて、キジムンの家を焼き払ふ様に妻としめし合せてあるのだつた。二人は無心に貝やら魚やらをいさつてゐたが、突然キジムン君は、クン／＼鼻を鳴らし初めた。「燻ぶつたい匂がするぞ。いやこれは必つと俺の家の焼ける匂だ、帰らう、おい帰るとしやう」「ナーンだ、そんな事はあるま

「いよいよやつたな、と思ひ乍ら答へる。」

兩人は家に帰つて来た。案の通りキジムの家は焼けてゐた。キジムはがつかりした。「俺はもう家もなくなつたんだし、此処には居れない」キジムは頗る元気が無かつた。「那覇うちなーに行く」と安里八幡の庭ぢまに、二葉のウスクがあるが、あれは主がないから、あそこに行つて、あの木の主になる。お前那覇に出る節は是非訪ねて来てくれ」そう言つてキジムはすごくと去つてしまつた。

数年後、此のウスク下の若者は所用があつて那覇に出た。「あ奴があんな事を言つてたが、真実か訪ねて見やう」彼は或日安里八幡を訪ねて行つた。近くの人家で様子をきかうと思つて、とある人家に入つて、お茶を飲み乍ら、主人に向つて問はず語りに、斯くの次第と話してしまつた。

すると今迄熱心に聴いてゐた此の家の主人は、突然起ち上つて、囲炉裏にくべてあつた燃えさしの薪を把ると、いきなり若者の目に突きつけ乍ら叫んだ。「貴様、憎い奴、貴様が俺の家を焼いたんだな」わざ／＼安里迄訪ねて行つて、生まれもつかぬ片輪の、盲目にされてしまつたのである。それから、ウスク下の家には、子々孫々眼病者が絶えないという話。

この話は素朴な語りに相当な（文学的？）加筆の手を加えた観があるものだが、いくつかのモチーフの点で長嶺さんの語りのそれとよく似ている。具体的に挙げれば、

- ・ 夫が毎夜キジムナーに連れ出されることを妻が嫌がる。
 - ・ キジムナーと夫が「なぜウスクの元に茅を積むのか」「お前が冬に寒くないようにだ」というやりとりをする。
 - ・ 漁に出たふたりが、焦げ臭い匂いがするしないと対話する。
 - ・ 安里にキジムナーを訪ねた夫が、キジムナーが姿を変えた人と茶を飲みつつしばし談話する。
- といったモチーフである。とりわけ、「なぜ茅を積むか」という問答は『長浜の民話』にないものである。校長も勤

められた村の知識人である長嶺さんのことであり、読谷村が公刊した『長浜の民話』もご存じであったくらいであるから、『島尻郡誌』の話を読んでおられる可能性は高い。これをもとにして、職業柄、生徒などに語った経験もあるのかもしれない。『島尻郡誌』のキジムナーの話に大変よく似た話はほかの地域でも採集されており、その影響力を考慮したほうがよさそうである。ただし、独特の語り口を持つ長嶺さんの語り(29)が、『島尻郡誌』の話と決定的に異なるのは、キジムナーと友人になつた人が慶良間の人であるという点である。(30)

十

ところで、キジムナーと親しくなるが破綻しの中に復讐を受ける「キジムナーと友達」(復讐型)の話は、すでに『球陽』の外巻として編纂された『遺老説伝』巻三(尚敬王三四年・一七四六)の第一二五話に見える比較的古い話型である。最後に、この話が現在の「キジムナーと友達」(復讐型)の伝承に与えた影響について少しばかり考察しておきたい。嘉手納宗徳氏の読み下し文の一部を改めたものをつぎに引く。(31)

往古の世、真壁郡宇江城邑に、一個の人有り。名を久嘉喜鮫殿と曰ふ。夜々海辺に出で、漁を以て営と為す。一夜、人有り来りて魚を取る。何処の人為るやを知らず。日往き月来り、遂に以て肝胆の交りを結び、毎夜相共に漁を以て営と為す。容貌時に変ずる有り。言語も亦常ならず。此れより鮫殿意に謂へらく、「彼の人は人間に非ず。鬼変じて人間と為れるならん。久しくは交はるべからず。若し久しく相交はらば、恐らくは之れが為に害を被らん」と。一夜、漁畢り、将に家に帰らんとす。窃かに其の往く所を窺ひ見るに、直ちに当山(本邑の前に在り)に往き去り、化して一株の桑樹に入り、而して其の跡を見ず。是の桑樹を見るに、千古を歴経し、甚だ老木為り。妖魔に変ずべきこと、決然として疑ひ無し。鮫殿、心中大いに驚きて家に回り、婦に説知すること一遍。遂に婦をして其の出漁の時を窺ひ、尽く桑木を焼かしむ。是れより妖魔、住居する所無く、即ち国

頭に^頭住きて住居す。一日、鮫殿事有りて首里に在るのとき、邂逅して朋友に市に逢ひ、共に酒家に入る。稍々久しく燕宴し、説話するの間、鮫殿、前に桑木を焼き遂に魔を去りし事を以て、朋友に直話す。他の朋友忽ち怒りを発し、其の帯ぶるところの小刀を將て、鮫殿の指の間を刺す。奈んせん鮫殿、魔変じて朋友の貌と為るを知らず。遂に金瘡(刀傷)を被りて死す。即ち本邑の属地^{ゆいばら}前原に葬る。鮫殿、其の未だ死せざる時、形体人と異なり、肌膚鮫の如し。但々其の指の間許、人間の肌の如し。故に他の妖魔、特に鮫殿の指の間を刺すしか云ふ。

この『遺老説伝』に見る「妖魔」の性格は、現在の「キジムナーと友達」(復讐型)に見るキジムナーそのものであり、また、ここには、

- ・ある人が妖魔と漁にでかける
- ・妻に命じて妖魔の住む木を焼かせる
- ・妖魔がよその土地に移り住む
- ・でかけ先にて、妖魔の化した人に、それとも知らず妖魔を追い払ったいきさつを話す
- ・怒った妖魔に害を加えられる

というモチーフがそろっている。したがって、これが「キジムナーと友達」(復讐型)の話型の最も古い文献記録と判断される。当時すでにこの型の話が伝承されていたことを伺わせると同時に、のちのち口頭伝承の世界に逆流して影響を及ぼしていた可能性も考えられる。

しかし、つぎに、この話と現在の「キジムナーと友達」(復讐型)との違いを挙げれば、まず、この話では「妖魔」の名をキジムナーとしていない。また、事件の始まりの土地が真壁郡宇江城邑であることも異なる。「真壁郡宇江城邑」とは「真壁真切宇江城村」のことであり、現在の糸満市宇江城である。そこをふりだしとして「妖魔」は那

覇の安里ならぬ国頭へ移り、そののち舞台は再び変わって、最後に首里で人が妖魔に殺される。また、妖魔に殺された人の名は「久嘉喜鮫殿」と伝えられ、この人は眼を潰されるのではなく指の間を刺されて死ぬのである。⁽³³⁾

難解な漢文体で書かれた『遺老説伝』には、これをのちに現代語訳あるいは翻案した民話集・昔話集がいくつもあり、一般にはそれらによつて読まれていたと考えられる。久嘉喜鮫殿と妖魔の話も、そうした形で伝承の世界の「キジムナーと友達」(復讐型)に一定の影響を及ぼしていただであらう。しかし、具体例として挙げた長嶺さんの語りの場合などを見てもわかるように、伝承の現状に対するその影響は直接的なものではないようである。

おわりに

以上見てきたように、豊見城村で採録された「キジムナーと友達」は、名嘉地の大屋家、豊見城の内間家など、あるいは糸満や慶良間という土地と深く結びつき伝説的な性格を示していた。名嘉地大屋家においては、それは伝説と言ふよりむしろ家の信仰と言ふべきものであり、近隣の人々によつて語られる「キジムナーと友達」は伝説的な世間話であつた。また、糸満や慶良間との関わりは、「キジムナーと友達」と漁民の信仰や動向との関係を示すものと予測されるが、これはさらなる調査を要する問題である。後半では、具体例として「キジムナーと友達」(復讐型)の語りを紹介したが、これも、キジムナーは糸満潮平玉井(または豊見城内間)から名嘉地大屋へ、名嘉地大屋から慶良間の新屋小に移つたとする豊見城村のキジムナー伝承圏のなかに生じたものである。それと同時に、この語りの枠組みは相当地に『島尻郡誌』によつていられるようであつた。「キジムナーと友達」(復讐型)の現在の伝承には『遺老説伝』よりむしろ『島尻郡誌』が関与している場合がありそうである。

最後になつたが、豊見城村の調査そのものがまだ完結しておらず、また、資料の収集・整理作業もその途上にあ

るため、現時点では論じ残してしまったことが多い。これらは、叢書の一冊としてこの仕事をまとめる際の課題にしたいと考えている。

注

- 1 『平成7年国勢調査報告』によれば、豊見城村の人口は平成二年に四〇七七七人、平成七年に四五二五三人。
- 2 『豊見城村史』（初版昭和三九年）など参照。なお、現在豊見城村では新しい村史の編纂準備中である。
- 3 拙稿「沖繩・豊見城の昔話」（『奄美沖繩民間文芸研究』第一八号・平成七年十一月）。
- 4 拙稿「沖繩・豊見城村の瓦屋節由来」（『立命館文学』第五五二号・近刊）はそのひとつ。
- 5 原田信之氏「南島の妖怪―キシムナー話をめぐって―」（『奄美沖繩民間文芸研究』第一三号・平成二年七月）。
- 6 柳田国男氏『日本昔話名彙』（日本放送出版協会・昭和二三年）による。
- 7 本格昔話は関敬吾氏（『日本昔話大成』角川書店↓『日本昔話集成』昭和二五〜三三年）の改訂による、完形昔話は柳田国男氏（『日本昔話名彙』日本放送出版協会・昭和二年）による命名。
- 8 このあたり、福田晃氏「総説・民間説話」（『民間説話―日本の伝承世界―』世界思想社・平成元年）など参照。
- 9 福田晃氏が「総説・民間説話」において、「奄美・沖繩における伝承の主流は、長く伝説にあつて、それが近代にまで及んでいる。（中略）あるいは世間話も伝説に包含されるかのごとくである」と述べておられる。注8参照。
- 10 佐喜真興英氏『南島説話』（大正一一年）（『女人政治考・霊の島々（佐喜真興英全集）』新泉社・昭和五七年）所収）。
- 11 『儀間の民話』20（読谷村民話資料集5）（読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編、昭和五八年）。『いしかわの民話』伝説編・東恩納25〜27（遠藤庄治氏監修・長浜昭美氏編、石川市教育委員会発行、昭和六〇年）。

- 12 「豊見城内間とキジムナー（キジムナーと友達）」（56）。注3参照。守本泰之・山本淳両氏による採録。
- 13 「豊見城内間とキジムナー（キジムナーと友達）」（68）。注3参照。和田雅裕・三輪一雅両氏による採録。
- 14 「糸満潮平玉栄とキジムナー」（70）。注3参照。松本孝三氏による採録。
- 15 以下は松田カツ子氏（豊見城村役所住民課課長）、中村史が上原ヨシさんと上原美代子さんより採録。ヨシさんは現当主夫人、大正九年二月二〇日生、名嘉地の西隣の田頭たがな集落出身。美代子さんはご長男のお嫁さん、昭和三年九月二三日生。
- 16 豊見城内間のことは全く御存じないとのことであった。
- 17 『豊見城村史』第九章 部落」、また、与根の長嶺新吉さんの「与根集落の始まり」（17）による。
- 18 また、名嘉地大屋の人々は、集落の人々を餓死から救うため倉のものを分け与えたことがあり、そのため正月の二日には集落の代表者が米と酒を持って御礼に来る習慣ができたという。戦後その倉も焼け、御礼も酒だけになったとのことである（字名嘉地の上原節子さんの話。「名嘉地大屋への謝礼の由来」（25）。注3参照。藤井佐美・組原洋子両氏による採録）。
- 19 村立中央図書館長（村史編纂室長兼務）の宜保喜久氏のお話によっても、上原さんはキジムナーのおかげで豊かになったと言われるのを嫌っておられ、あまりその話はされないとのことである。
- 20 『沖繩・糸満市の民話』118・192（立命館大学説話文学研究会編、平成八年）、『とかしきの民話』4（渡嘉敷村史編集委員会編・『渡嘉敷村史』別冊・昭和五八年）参照。
- 21 『沖繩県史』第二二巻（民俗I）「第四 生業」（昭和四七年原本）、中樞興氏編著『日本における海洋民の総合研究―糸満系漁民を中心として―』上下（九州大学出版会・昭和六二年、平成元年）など参照。
- 22 金城善氏（糸満市役所総務部総務課）に若干のご教示をいただいた。

- 23 『沖繩県史』第二三卷(民俗Ⅰ)「第四 生業」、『渡嘉敷村史』通史編「第六章 漁業 鯉漁について」(平成二年)など参照。
- 24 平成二年八月八日、藤井佐美・組原洋子両氏採録。筆者翻字。
- 25 岩瀬博・遠藤庄治・福田晃氏編、同朋舎・昭和五八年。
- 26 読谷村民話資料集3 (昭和五六年)。
- 27 島尻郡教育部会員編・昭和一二年初版。
- 28 キジムナーが安里八幡のウスクに移ったという話はほかにも例が多い。たとえば、久米島の仲里村真謝から(那覇の)安里へ移ったとするもの(伊芸弘子氏編著『沖繩首里の昔話―小橋川共寛翁のチテイバナシー』へ三弥井書店・平成四年)、島尻の「ンナトウ小」から那覇の安里へ移ったとするもの(遠藤庄治氏監修・宜野座村教育委員会編『宜野座村の民話』伝説編へ昭和六二年)など。安里の八幡宮は第一尚氏最後の尚徳王が戦勝祈願のために建てた。安里八幡のウスクは琉歌にもうたわれて著名であったようである。
- 安里八幡の松抱きゆるおすく、おれが露たいはど里とのかれらぬのかぬづく互ひに思てたばうれ(大意…安里八幡の松を抱いているウスクの木、その露を吸ったせいであなたと離れられない。離れられないからには、あなたも私のことを思ってください。清水彰氏編著『琉歌大成』本文校異編へ平成六年・131)
- また、
- 安里八幡の松抱きゆるおすく、おれが露たいはど里とのかぬ(同・130)
- なぜ安里八幡かという理由はまだ考え得ていない。
- 29 『日本昔話通観』第二六卷(沖繩)「44 人とキジムナー―仕返し型」。採集地は中頭郡嘉手納町嘉手納。原資料未見。この話ではキジムナーと友人になった人の家までが『島尻郡誌』とおなじく「仲里真切真謝村のうすくちや

という家」である。

30 字高嶺の大成ノブさんの語りはややわかりにくいのであるが、梗概化して示せば、

キジムナーははじめ名嘉地にいたが、豊見城に移った。いっしょに慶良間に漁に行ったが、帰りにサバニが沈んだ。主人は慶良間に祭られている。

とのことであつた。キジムナーとともに慶良間に行ったのは名嘉地大屋か、豊見城内間か、もうひとつ不明である（「名嘉地大屋とキジムナー」59）。字翁長の高安盛登さんも、キジムナーは名嘉地大屋から慶良間の新屋小に移つたと言つておられた（「名嘉地大屋とキジムナー」67）。注3参照。

31 沖繩文化史料集成6『球陽外巻 遺老説伝』（角川書店・昭和五三年）による。

32 「妖魔」が住んでいたのは「桑樹」とあるのだが、沖繩本島においてウスクと呼ばれる雀榕はくわ科の高木であり、鬱蒼とした枝葉や気根を茂らせる。魔的なものが住むと言うも、さもありなんという観の大樹である。そうすると、『遺老説伝』の話の場合、「桑樹」とはウスクのことをさしていると推測される。

33 加うるに、妖魔ははじめから人の姿をしていたこと、その正体を妖魔であると知つたこと、妖魔の住む木は妖魔と友人になつた人の家にあつたのではないこと、妖魔が移り先に遊びに来いとは言つていないことなど。

追記

本稿は、平成八年八月一日（日）、奄美大島の瀬戸内町古仁屋^{こにや}で行われた奄美沖繩民間文芸研究会大会において口頭発表したものの一部をまとめたお話しものです。この滞在時には、台風によって二日間ばかり島内に閉じ込められるという忘れ難い体験も致しました。岩瀬博先生、山下欣一先生、真下厚先生をはじめとして、発表の際に数多くのご教示をいただきました先生方に心より御礼申し上げます。

また、平成九年三月二三日(日)、伝承文学研究会例会の席上でも本稿の発表をさせていただきました。その際に、福田晃先生、松本孝三先生、美濃部重克先生、三浦俊介氏がくださいましたご意見等につきましては、今後の課題として必ず勉強させていただきます。ありがとうございます。

なお、本稿は平成八年度・科学研究費補助金(奨励研究A)による研究成果の一部です。